

# 下野地域の 後・終末期古墳の歴史的意義

## 6～7世紀・東国統治の一事例

Historical Meaning of Ancient Tombs in Late Stage in Shimotsuke Area :  
A Case Example of the Rule of the Eastern Area in the 6th and 7th  
Centuries

広瀬和雄

HIROSE Kazuo

はじめに

- ①しもつけ古墳群の動向
- ②下野地域の横穴式石室
- ③下野地域の6～7世紀の政治動向

おわりに

### 【論文要旨】

6世紀後半ごろに施行された中央政権の地方政策、それは東国統治を再編成しようとするもので、既往の大首長をつうじた統治から、狭い地域を統治していた小首長のきめこまかな掌握への転換であった。そのあたりの事情は、6世紀後半ごろにおける前方後円墳の急増という事実が明白に物語っている。

そうした東国支配は、各地の実態におうじて多様なありかたをみせるが、そしてそれを6～7世紀の有力古墳の動態がしめしているが、下野地域では中核首長層の選別と優位性の付与があったようだ。しもつけ古墳群の〈われわれ意識〉を強烈に発揮している横穴式石室や墳丘などの分析をつうじて、その間の事情にせまってみた。

ところで、新たな中央政権の統治方式の進行は、在地首長の側にもさまざまなリアクションを生み出したようである。しもつけ古墳群の周辺に分散居住しながら、密接不分離の関係にあった中核首長層はさらなる結合をつよめ、その帰属意識を明瞭にあらわすために下野型石棺式石室という革新的な墓室をつくりあげたのが、そうである。それは、小型で整美な墓室空間で、畿内首長層のような巨大化指向とはまったく異なる葬送観念をあらわしていて、そこに在地首長層のつよい意志の発動を看とることができる。

いっぽう、その周辺に展開していた多くの首長層は個々に中央政権と対応したようであるが、中核首長層に対抗してか胴張り形式の横穴式石室を採用することで、ゆるやかなイデオロギー的結合をみせるにいたる。ただ、胴張り形式という共通性をもちながらも、平面プランや用材、その架構法などにおいて多彩な横穴式石室を共有することからすれば、そうした動きは中核首長層ほどの緊密さをもってはいなかったようにみえる。

後・終末期古墳を彩る横穴式石室は、塊石や河原石や切石を積み上げてつくるから、当初からの明確な計画がないと一定の形式は完成しない。すなわち、偶然性はさほど認めがたい構築物だから、その分析一型式分類と編年一をつうじて首長層や中間層の明瞭な意志にせまることは、けっして不可能ではない。本稿はそういった観点からのひとつの試論でもある。

【キーワード】 横穴式石室、しもつけ古墳群、下野型石棺式石室、胴張り構造、中央政権の地方政策